

小泉八雲(ラフカディオ・ハーン)と災害

—日本初の防災教材「稲むらの火」原作者—

進藤令子

Lafcadio Hearn and Disasters —Author of Japan's first disaster prevention educational material:
The fire of "Inamura(rice sheaves)" —

Reiko Shindo

はじめに

焼津ゆかりの明治時代の作家・小泉八雲(1850–1904)はギリシャのレフカダ島でアイルランド人の父とギリシャ人の母との間に次男として、1850年6月27日誕生した(本名:パトリック・ラフカディオ・ハーン)。イギリスで育ち、アメリカを経由して、1890(明治23)年4月4日、ハーバー・ブラザーズ(Harper & Brothers)社の特派員として、船で横浜港に到着した。来日後、同年8月より島根松江尋常中学校・師範学校、そして1891(明治24)年11月より熊本第5高等中学校で英語教師となり、1894(明治27)年神戸市で英字新聞社の神戸クロニクルの記者、1896(明治29)年9月より東京帝国大学英文科講師、1904(明治37)年3月より早稲田大学文学部講師となり、4月に『怪談』を出版、9月26日狭心症のため、54歳で逝去した。

ハーン(八雲)は1897(明治30)年に初めて焼津を訪れて以来、亡くなる1904(明治37)年まで、明治31年と36年を除く6回焼津で夏を過ごしている。

妻セツ(1868–1932)が書いた『思い出の記』に下記の文がある。

「ヘルンの好きな物をくりかえして列べて申しますと、西、夕焼け、夏、海、遊泳、芭蕉、杉、寂しい墓地、虫、怪談、浦島、蓬莱などございました。場所では、マルティニークと松江、美保の関、日御碕、それから焼津、食物や嗜好品ではピフテキとプラムブーデン(プラムプティング)と煙草。嫌いな物は、うそつき、弱いものいじめ、フロックコートやワイシャツ、その他いろいろありました。」ⁱ(小泉セツ『思い出の記』より)筆者が所属する静岡福祉大学附属図書館(焼津市)では、焼津市を愛したハーン(八雲)の業績を伝える目的で、

企画展を継続して実施してきた。2012(平成24)年に企画展「小泉八雲と自然災害」、2014(平成26)年に企画展「紙芝居から伝える小泉八雲」等である。

2025(令和7)年6月27日、ハーン(八雲)の誕生日に、ハーン(八雲)関連の図書を集めた既設の図書コーナーを地域の子どもから幅広い世代に利用してもらえることを目的に、図書館入口近くに常設の小泉八雲文庫として移動した。ハーン(八雲)は「怪談」などの再話小説の作家、ジャーナリスト、英語教師として知られているが、日本初の防災教材である「稲むらの火」の原作『生き神 (A Living God)』はアメリカ、イギリスで出版され、今では世界共通言語である“tsunami”ⁱⁱ(つなみ)という言葉の世界に紹介するなど災害研究者としての一面も持っていた。

本稿では、ハーン(八雲)と災害との関わりに光をあてることで、ハーン(八雲)が災害に強い関心をもっていたからこそ『生き神 (A Living God)』を執筆し世界に向けて発信したことを説明していきたい。

1. ハーン(八雲)と災害について

ハーン(八雲)と災害の関連を示す資料として、当館で2012年に開催した企画展「小泉八雲と自然災害」を紹介する。

企画の着想は、島根八雲会会員の中川智視氏(明治大学兼任講師)が、ハーン(八雲)の生前の所蔵図書を一括保管する富山大学附属図書館ヘルン文庫での調査の過程で、明治三陸地震に関する英文のリーフレット「The Great Disaster in Japan, 15th June, 1896」(「日本での大災害 1896年6月15日」)ⁱⁱⁱを発見したことが、読売新聞富山版(2011年10月1日付)で報じられた

ニュースを筆者が知り、中川氏に協力依頼をおこなったことで実現した。同氏より快諾をいただき、2012年5月、英文冊子及び翻訳を本学図書館で初公開したことである。この英文冊子は、横浜の英字新聞「ジャパン・ガゼット」(The Japan Gazette)の記者たちが、1896(明治29)年6月15日に東北沿岸を襲った明治三陸地震に関連する記事を英訳し、集約したものであり、国立国会図書館はもとより、明治時代の新聞を多数所蔵している横浜開港資料館にも当時の新聞が現存していないため、現存する数少ない英語で残された明治三陸地震の記録と考えられる。冊子の概要は次のとおりである。「ジャパン・ガゼット」紙の記者数名が、明治三陸地震の津波で最大の被害を受けた岩手県釜石町(現釜石市)の報告を中心として、地震に関する当時の知見、釜石までの往復の旅が書き下ろされている。それに加え、当時の公式文書や日本の新聞(時事新報、朝日新聞、日日新聞)と雑誌の記事、大きな被害を受けた岩手県等の行政機関からの報告書の英訳が、掲載されている。

また、同冊子にはハーン(八雲)が世界に広げた“tsunami”【初出:1897年 Gleanings in Buddha-Fields Oxford English Dictionary, 2nd ed】がp26に2回使われていることが今回の調査で再発見された。

この冊子はハーン(八雲)の所蔵を示す“へるん”の所蔵印が文頭に押印されていることから、地震発生後の「Atlantic Monthly」1896年12月号に発表された『生き神(A Living God)』と1897(明治30)年に発表された『仏の畑の落穂(Gleanings in Buddha-Fields)』での『生き神(A Living God)』を執筆する上で大きな参考資料として読まれていたことが推測できる。下記のとおり、該当箇所を示すこととする。

【英語原文】

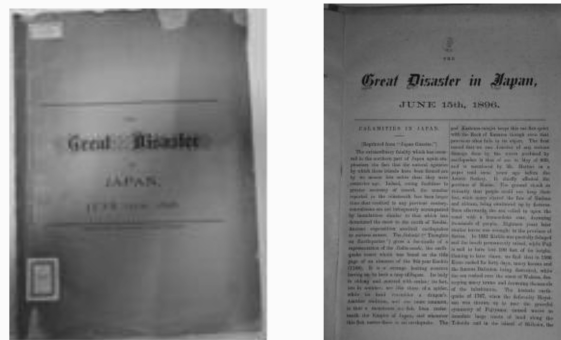
The Jiji Shinpo's correspondent telegraphs from Shizukawa, one of the most severely afflicted districts, as follows; -In Motoyoshi district the most terribly devastated localities are Karakuwa, Otani, Utazusaki, Irimaye and Shizukawa...

At about half-past 8 o'clock a fearful sound as that of a thunder-clap was heard and shortly afterwards the cries of tsunami tsunami were raised on all sides.

【日本語訳】

「時事新報」の特派員はもっとも被害を受けた地域のひとつ、志津川から以下のように打電した。
本吉地区ではもっともひどい被害を受けた場所は、唐

桑、大谷、歌津崎、伊里前、それから志津川である。8時半ごろ雷鳴のような恐ろしい音が聞こえ、その直後に「津波(tsunami)」「津波(tsunami)」という叫び声があちこちから上がった。(訳注:原文“tsunami”とローマ字表記)。



「日本での大災害 1896年6月15日」
富山大学附属図書館ヘルン文庫所蔵
本学図書館:複写所蔵、翻訳冊子初公開

(1) 来日以前のハーン(八雲)と災害について

ハーン(八雲)は、来日前はアメリカのニューオーリンズで新聞記者として活躍した経歴を持つ。ニューオーリンズには1877年から1888年まで滞在した。ニューオーリンズは海抜が水面以下というところも多いため、水害に悩まされてきた土地でもある。ハーン(八雲)が10年ほど滞在したニューオーリンズは、ミシシッピ川の南端に位置し、カリブ海に面した水運の要衝として18世紀前半から発展を遂げてきた町である。

ハーン(八雲)は、このニューオーリンズを舞台にした作品を執筆している。『チータ(Chita)』は八雲がニューオーリンズに住んでいた時の大嵐による大洪水の被害を描いた作品である。アメリカの雑誌「ハーパース・マンズリー」の1888年4月号で発表された同作品の3部構成の概要を説明する。第1部は、ミシシッピ川河口にある島々の様子が説明されている。後半部では、嵐を予兆させる不穏な状況のもと、その島のひとつであるグラント島に向けて出帆した客船スター号が船長を失いながらも嵐を切り抜けた話と島で最大の建物である舞踏会場が嵐に飲まれてしまった話が交錯する。

第2部では、漁師のフェリウとカルメンのビオスカ夫妻に焦点が移される。ふたりはスペインで娘を亡くした経験を持つ。第1部で語られた嵐の後、フェリウは

舟を出し、生きている女の子を発見し、命がけで助け、引き取って育てることに決める。彼女はユーラリーという名で、ニューオーリンズのクレオール言語を解し、富裕層の出身であることが判明する。

ユーラリーの母親の遺体が捜索によって確認され、父親ジュリアンと娘ユーラリーは行方不明のまま、墓が作られる。その後娘の父親であるジュリアンの生存が確認される。

第3部では、ビオスカ夫妻に引き取られた女の子は、ふたりの死んだ娘の名であるチータと名づけられ、自然の中で育てられる。南北戦争直後の1867年、伝染病がニューオーリンズを襲う。ジュリアンは父親の恩人エドワーズの往診のため、ビオスカ夫妻のいる島へと向かうが、エドワーズは亡くなっていることが知らされる。ジュリアン自身も島で発病してしまう。彼は島に留まってカルメンの看病を受けることになり、成長したチータと出会う。ジュリアンはチータの右耳の後ろにあるほくろから、実の娘ユーラリーであることを確信するが、彼の病が伝染病であることが分かり、彼女にこれ以上近づくことができないまま、息絶える。災害（水害と疫病）が重要なテーマになっている作品である。

(1) 来日後の八雲と災害について

【松江市】

ハーン(八雲)は1890年の来日後、1890年8月から1891年10月まで松江市に滞在している。

水の都と言われる松江市は、たびたび水害に襲われてきた。松江市HP「水がはぐくんだ松江の文化のヒストリー～STORY5 度重なる水害とその克服のために～」に松江市と水害について次の記載がある。

「松江は水に囲まれた地域です。そのため明確な記録が残る江戸時代以降でも、数限りなく水害、特に洪水に襲われました。」

また、ハーン(八雲)が熊本に移った2年後の1893(明治26)年の大洪水について次の記載がある。

「明治に入って最大の水害は、明治26(1893)年10月の大洪水です。この年は乃木福富に区内観測所が設置されており、10月10日以降17日までに419mmの降水量を記録しています。「山陰新聞」によれば、10日より降り始め、13日には低地の石橋町、田町などで浸水、14日には京橋川があふれ、16日ごろに深さ9尺に及んだといひます。18日朝にようやく浸水深さが減つ

て8尺になったとあり、松江市街地はゆっくり水に浸かり、ゆっくり水が引いたことが分かります。西田千太郎(ラフカディオ・ハーンと親交が深かった島根県尋常中学校教頭)が残した日記によると、避難者は数千人以上に及び、「延宝2年の洪水以来、嘗てなき所なりと言う。」と記しています。先の1674年の大洪水を引き合いに出して、惨状を嘆いているのです。一方で、死者の記録がないのは驚きです。」

この1893(明治26)年の大洪水に対して、1893年(明治26)10月23日付の八雲自筆書簡が島根大学附属図書館に所蔵され、公開されている。^{iv}

山陰新聞社に松江水害見舞金50円送付の内容である。英文書簡の内容は次のとおりである。

【英語原文】

Dear Nishida—

I fear this may not find you well, because of the terrible weather and the terrible trouble in Matsue. I do not wish you therefore to have any trouble; but at the same time, I wish to express my sorrow and my love for Matsue by sending such little help as I can afford. In order to avoid giving you trouble I have sent fifty yen to the San-In-Shimbun office for the relief-fund:—I do not know any one else to whom to send it except yourself, but I fear you have trouble of your own. Were I not just for the moment straitened by other expenses, I would try to send more; but this is the best I can do just now—as my money is nearly all in Government bonds.

I trust you are soon going to be well enough to let us hear from you. My knowledge of what happened came through Adzukizawa. The boy wrote me a beautiful letter. He told me you were safe, but not well.

Anxiously with love from all of us

Lafcadio Hearn Kumamoto,

Oct. 23d '93

【日本語訳】

親愛なる西田—

この手紙が届くときは、あなたの体調が良くないのではないかと心配しています。松江はひどい天気で、大災害があったのですから。わたしは、あなたが災害に

会われていないことを願っています。ところで、やはり、わたしはできる限りの、寸志をお送りして松江に対するわたしの悲しみと愛情を表したいと思います。あなたには・・・・・・ご面倒をかけないように、山陰新聞社に義援金50円を送りました。わたしは、あなた以外にそれを送る人を知りませんが、あなたには自身の苦労があるのではないかと懸念しています。もしも今、他の出費で困っていなければ、もっと多く送るでしょうが、今のところは、これが自分にできる限り、ぎりぎりのところです。一わたしのお金は、ほとんどすべてが国債になっていますから。

間もなくあなたは体調が良くなられて、お便りが頂けるようになると思います。そちらの出来事を知ったのは、小豆沢[八三郎]を通してでした。あの生徒がみごとな手紙をくれました。あなたは無事でしたが、体調はよろしくないと書いていました。

われわれ一同、心配しながら愛をこめて

ラフカディオ・ハーン 熊本

[18]93年10月23日

日本語訳：常松正雄『ラフカディオ・ハーン 西田千太郎 往復書簡』(八雲会、2020年)より
八雲が松江市被災後、約1週間後見舞金を送付した手紙は松江を心配する彼の心情が伝わる内容である。

【神戸市】

ハーン(八雲)は1894(明治27)年10月から1896(明治29)年8月まで神戸に滞在した。神戸には神戸クロニクル社の招きに応じて記者として記事を執筆した。八雲は同紙に「地震と国民性(Earthquakes and National Character)」という論説記事を発表している。『生き神(A Living God)』を発表する2年前である。記事の冒頭は次のとおりである。

「地震と国民性」1894年10月27日土曜日

「近年起こった大災害——明日が三周年に当たる岐阜の地震、比較的最近の鳥取と岡山の洪水、つい最近の山形の災難——は、実に国家的な不幸とも言うべき性質のものであった。限られた地域だけを直接襲うにせよ、そうした天災の間接的な結果は日本全土で感じられ、国庫からの援助によってのみ救済され得るのである。しかし、定期的に起こるそれぞれの災害の後に見られる日本人の素晴らしい回復力、あるいは苦難に際しての見事な忍耐力を、むしろ称賛すべきなのか

もしれない。実際、回復力も忍耐力も独特なものである。そして、何千年にもわたって日本がまったく同じように苦しんできたことを考えると、そうした異常な条件が国民性に何らかの影響も及ぼさなかったと信じることは難しい。」

ハーン(八雲)は災害後に見られる日本人の素晴らしい回復力、忍耐力を賞讃していますが、それが「不安定」という、日本の物質的な特殊性に起因するとも指摘しており、伝統の習慣によって20年ごとに取り壊され再建される伊勢神宮を例に引いて、日本人は自然の不安定に人工的な不安定を対置させることで、環境の厳しく荒々しい条件に対処していると、鋭い観察を述べている。

そして、1896(明治29)年1月15日 46歳、小泉八雲と改名する。

2. 日本初の防災教材「稲むらの火」について

(1) 『生き神(A Living God)』について

ハーン(八雲)は同作をアメリカの雑誌「Atlantic Monthly」【170号 1896年12月号(11月31日発行)：p833-841】に発表した。p.837 IIIに明治三陸津波と濱口梧陵(五兵衛)についての次のとおり記載されている。

「Now concerning Hamaguchi. From immemorial time the shores of Japan have been swept, at irregular intervals of centuries, by enormous tidal waves, — tidal waves caused by earth quakes or by submarine volcanic action. These awful sudden risings of the sea are called by the Japanese tsunami. The last one occurred on the evening of June 17, 1896, when a wave nearly two hundred miles long struck the northeastern provinces of Miyagi, Iwate, and Aomori : wrecking scores of towns and villages, ruining whole districts, and destroying nearly thirty thousand human lives. . . .」

その中で、日本では尊敬される人物は生きながらにして神として祀られることがあるとして、取り入れたばかりの稲むらに火を放って村人たちを高台に導き、その命を津波から救い、神として祀られた、浜口五兵衛という人物の活躍を描いた。この物語は、この年の6月に三陸海岸を襲い2万2千人もの犠牲者を出した明治三陸地震津波のニュースを聞き、ハーン(八雲)がかねて伝えきいていた安政南海地震津波の際の浜口梧陵

の逸話をヒントにしてこの地震にまつわる実話から「稲むらの火」という物語が生まれ、教科書に掲載されて、昭和 12～22 年まで尋常小学国語読本に掲載された。

ハーン(八雲)が執筆に参考にした資料として、富山大学附属図書館ヘルン文庫での調査の過程で、発見された明治三陸地震に関する英文のリーフレット「The Great Disaster in Japan, 15th June, 1896」(「日本での大災害 1896 年 6 月 15 日」)の報告が大きく役立っていたことが推測できる。

また、ハーン(八雲)が明治三陸地震と安政南海地震津波の際の浜口梧陵の逸話をどのように入手したのかについては、次の記載がヒントとなる。

妻セツ(1868-1932)が書いた『思い出の記』に下記の文がある。「食事の時にはいろいろな話を致しました。パパは西洋の新聞などの話を致しますし、私は日本の新聞の話を致します。新聞は永い間「読売」と「朝日」を見ていました。」(小泉セツ『思い出の記』より)

ハーン(八雲)は、神戸時代に明治三陸地震を小泉セツさんとの話題の中で知り、「The Great Disaster in Japan, 15th June, 1896」(「日本での大災害 1896 年 6 月 15 日」)報告を参考にして、この日本の災害と災害に対する日本人の姿を 1854 年の安政南海地震での濱口梧陵の逸話を合わせた形で新聞記者としての視点をもって、世界に向けて同作を発表した。

ハーン(八雲)が明治三陸地震をどのように知ったのかは全国紙では、「東京朝日新聞」が 1896 年 6 月 17 日付の紙面で下記のとおり報じた。

「16 日仙台特発:昨夜より今朝迄にかけ牡鹿本吉二郡に海嘯(つなみ)起こり家屋の流されたるもの 5 百余戸、溺死者千余人・・・」と報じている。

6 月 20 日以降から本格的に全国紙での掲載記事がはじめられる。^v

ハーン(八雲)はアメリカでは新聞記者として活動していた経緯もあり、来日後も、新聞に強く関心をもっていたことは推測される。

ハーン(八雲)が濱口梧陵の逸話をどの様に知ったのかについても今後調査を進めていきたいと考える。

(2) 「稲むらの火」誕生について

【「稲むらの火」の実話と執筆者の中井常蔵】

内閣府防災情報 過去の災害に学ぶ(特別編)^{vi}の記載より抜粋する。

「1854 年、安政南海地震津波が広村(現在の和歌山県広川町)を襲いました。この大津波が襲った際、浜口梧陵は、暗闇の中で逃げ遅れていた村人を、収穫したばかりの稲を積み上げた「稲むら」に火を放って高台にある広八幡神社の境内に導きました。1896 年、ラフカディオ・ハーン(小泉八雲)は、この浜口梧陵が稲むらに火をつけて人々を救った逸話をヒントに、日本の神の概念は諸外国のそれとは著しく異なっていることを述べた作品“A Living God”の中で、高台にある自分の家の周りがある田の稲むらに火を放って村人を導き、その命を津波から救い、神として祀られた浜口五兵衛という人物の活躍についての物語を書きました(注:梧陵は神と祀られておらず、梧陵の家は高台ではないなど実話と異なるところもあります)。

昭和 9 年、地元出身の教員であった中井常蔵は、郷土の偉人を題材にしたこのラフカディオ・ハーンの“A Living God”に感動し、その真髓を小学生にもわかるよう短く縮した作品を文部省の教材公募に応募し、入選しました。これが昭和 12 年から 10 年間、小学国語読本(5 年生用)に掲載された「稲むらの火」です。

さらに、浜口梧陵は、安政南海地震津波で被災後、百年後に再来するであろう津波に備え、巨額の私財を投じ、海岸に高さ約 5 m、長さ約 600m の広村堤防(防波堤)を築き、その海側に松並木を植林しました。約 4 年間にわたるこの大工事に村人を雇用することで、津波で荒廃した村からの離散を防いだとのこと。そして、安政南海地震から 92 年後、昭和の南海地震が発生し、高さ 4～5 m の大津波が広村を襲いましたが、梧陵が築いた広村堤防は、村の居住地区の大部分を津波から護ったのです。」

【濱口梧陵(1820-1885)について】

稲むらの火の館(和歌山県有田郡広川町)資料室【濱口梧陵】^{vii}の記載より抜粋する。

「濱口梧陵は広村(現在の広川町)で分家濱口七右衛門の長男として生まれ、12 歳の時に本家の養子となり銚子での家業であるヤマサ醤油の事業を継ぎました。

安政元年(1854 年)、梧陵が広村に帰郷していた時、突如大地震が発生し、紀伊半島一帯を大津波が襲いました。梧陵は、稲むら(稲束を積み重ねたもの)に火を放ち、この火を目印に村人を誘導して、安全な場所に避難させました。

しかし、津波により村には大きな爪あとが残り、この

変わり果てた光景を目にした梧陵は、故郷の復興のために身を粉にして働き、被災者用の小屋の建設、農機具・漁業道具等の提供をはじめ、各方面において復旧作業にあたりました。また、津波から村を守るべく、長さ600m、高さ5mの防波堤の築造にも取り組み、後の津波による被害を最小限に抑えました。」
安政南海地震発生から『生き神（A Living God）』そして「稲むらの火」誕生後までの歩みを時系列で示すと下記のとおりとなる。

年	出来事
1854 年	安政南海地震【12 月 24 日（旧暦 11 月 5 日）】
1896 年	明治三陸大津波【6 月 15 日】 『生き神（A Living God）』 「Atlantic Monthly」【170 号 12 月号（11 月 31 日）】収録
1897 年	『仏の畑の落穂（Gleanings in Buddha-Fields）』に収録
1934 年	文部省が国語読本の教材募集中井常蔵「稲むらの火」が入選
1937 年～1947 年	『尋常小学校国語読本』へ掲載
2005 年	稲むらの火普及プロジェクトによりアジア 8 カ国の稲むらの火絵本作成【バングラデシュ、インド、インドネシア、マレーシア、ネパール、フィリピン、シンガポール、スリランカ合計 8 カ国】
2011 年	『小学校国語教科書 5 銀河～百年後のふるさとを守る～』（光村図書出版）へ掲載

実話と「生き神様」の主な相違

比較項目	実話	「生き神様」
名前	浜口儀兵衛（梧陵）	浜口五兵衛
年齢	35 歳	老人
浜口家の住居	低い低地の集落	高台
村の宵祭	なし	あり

村人	1323 人	400 人
地震の揺れ	激震	長くゆっくりした揺れ
稲むらに火を放った理由	漂流者に安全な場所を知らせるため	村人に津波襲来を知らせるため

広川町役場 HP 「稲むら燃ゆ」（1998）より抜粋

終わりに

安政南海地震での濱口梧稜の故事をハーン（八雲）が執筆した『生き神（A Living God）』を基に中井常蔵執筆の「稲むらの火」として、戦前から戦後の防災教材として、日本、世界に伝えられた。
日本での「稲むらの火」をテーマとする図書は114冊にのぼる。（国立国会図書館所蔵図書 2025 年 8 月現在）
今後、ハーン（八雲）が濱口梧稜の故事を神戸時代にどの様に知ったのかについて調査すると共に、小泉八雲文庫を地域の子どもから幅広い世代に利用してもらう様に周知活動に取り組んでいきたいと考えている。

【筆者所属】 静岡福祉大学附属図書館

【引用文献一覧】

ⁱ 田邊隆次『小泉八雲全集【思ひ出の記 小泉節子】』、1927 年、p. 352
ⁱⁱ “tsunami.” Oxford English Dictionary. 2nd ed, vol. XVIII, Oxford UP, 1987, p. 637.
1897 L, HEARN Gleanings in Buddha-Fields: “Tsunami!” shrieked the people; and then all shrieks and all sounds and all power to hear sounds were annihilated by a nameless shock heavier than any thunder, as the colossal swell smote the shore with a weight that sent a shudder through the hills,
ⁱⁱⁱ 富山大学学術情報リポジトリ The Great disaster in Japan, June 15th, 1896.
^{iv} 島根大学附属図書館デジタルアーカイブ [BOOKID:2228987][1891（明治 24 年[2]月[5]日）] 松江 西田への病気見舞 1 枚 1 頁, 封筒
^v 国立国会図書館津波デジタルライブラリーTDL 文献リスト - newspaper 38
^{vi} 内閣府防災情報 過去の災害に学ぶ(特別編)津波と稲むらの火
^{vii} 和歌山県稲むらの火の館資料室(濱口梧稜) 和歌山県有田郡広川町